

## チワン語龍茗方言の声調体系とその通時的考察

黄 海萍（一橋大学）

## 1. はじめに

チワン語は中国南部に居住する少数民族チワン族の言語である。韋・覃（1980）によると、チワン語は北部方言と南部方言に大別され、さらに北部方言は7つ、南部方言は5つの下位方言にそれぞれ分類される（図1）。定説によると、チワン語の北方方言はタイ・カダイ語族の北方タイ諸語に、チワン語の南方方言はタイ・カダイ語族の中央タイ諸語に分類される（Li 1977）。本発表が分析対象とするチワン語龍茗方言（以下、龍茗方言）はタイ・カダイ語族・中央タイ諸語・チワン語・南部方言に属す下位方言の1つである。龍茗方言は、広西チワン族自治区（図2）崇左市天等県龍茗鎮（図3）の逐仗屯で話されているチワン語の変種を指す。龍茗方言の音韻体系は筆者によって記述されているが（黄2018）、その声調体系はこれまで記述されてこなかったため、本発表が初めて龍茗方言の声調体系を報告するものとなる<sup>1</sup>。

本発表の目的は、龍茗方言の声調体系を明らかにするとともに、龍茗方言がどのような通時的な変化を経験してきたのかについて初歩的に考察することにある。



図1 チワン語分布概略地図

図2 広西チワン族自治区地図

図3 天等県地図

<sup>1</sup> なお、William J. Gedney がチワン語の Lungming 方言を記述している（Hudak 1991 参照）が、この Lungming 方言とは旧龍茗県添等鎮（現在の天等県天等鎮）の方言であり、本発表の対象である天等県龍茗鎮の方言（龍茗方言）ではない（黄2018）。両方言の間には分節音および声調に組織的な差異が観察されるので別の方言である。したがって、龍茗方言を初めて記述したのは筆者であり、W.J. Gedney ではない。

定説 (Li 1977) によると、タイ諸語の祖語 (以下、タイ祖語) に再建される声調の数は、平音節 (母音あるいは共鳴子音終わりの音節) が 3 種類 (\*A、\*B、\*C) であり、促音節 (阻害音終わりの音節) が 1 種類 (\*D) である。現代タイ諸語方言では、祖語におけるこれら 4 つの声調が、語頭の有声性に基ついて分裂を起し、その数を最大 8—すなわち祖語における数の倍 (A1, A2, B1, B2, C1, C2, D1, D2) —にまで増やした (1 は祖語における無声、2 は祖語における有声を表す)。促音節ではさらに、母音の長短に条件付けられた分裂が生じ、声調の数が増加した (DS1, DS2, DL1, DL2) (S は祖語における短母音、L は祖語における長母音を表す)。表 1 に示すように、タイ諸語の諸方言には平音節と促音節を合わせて最大 10 種類の声調が対立しうる。実際に、現在までに調査された 58 地点のチワン語諸方言のほとんどにおいて、平音節には 6 声調 (A1, A2, B1, B2, C1, C2)、促音節には 4 声調 (DS1, DS2, DL1, DL2)、合計 10 声調が認められる (広西 1994)。

表 1 タイ諸語の声調体系 (Li 1977 : 25–28 による)

頭子音	タイ祖語の声調 主核母音	*A	*B	*C	*D
	無声	短	A1	B1	C1
長		D1L			
有声	短	A2	B2	C2	D2S
	長				D2L

龍茗方言も他のチワン語諸方言と同様の声調体系を有するのだろうか。そこで本研究は、龍茗方言の声調の数と種類を明らかにするために、母語話者である筆者によって産出された約 6000 の単音節語を、聴覚印象および基本周波数 (F0) の抽出に基礎を置いた音響音声学手法に基ついて分析した。

## 2. 分析

### 2.1 方法

崇左市天等県のチワン語麗川方言の音韻体系を記述した『壮語音系匯編』(1961: 356–362)、『広西民族語言方言詞彙』(広西壮族自治区少数民族言語文字工作委员会 2008) の語彙リスト、Pittayaporn (2009: 322–361) の語彙リスト、Li (1977: 25–28) の調査表に、筆者が独自に作成した最小対の語彙リストを加え、合わせて約 6000 の単音節語からなる龍茗方言の語彙リストを作成した。筆者がこの語彙リストのすべての語を発話し、録音した。録音された音声を聴覚印象および、基本周波数 (F0) の抽出に基礎を置いた音響音声学手法によって分析した。

### 2.2 結果

分析の結果、(1) の最小対が示すように、平音節には 5 つの声調が対立することが明らかとなった。タイ祖語との対応に基ついてそれぞれ A1, A2, B1, B2, C と名付ける。それぞれの声調の基本周波数 (F0) 曲線を図 4 に示す。(調値は Chao (1930) の 5 段数値表記法で表す。1 が低域、2 が次低域、3 が中域、4 が次高域、5 が高域を表す。)

- (1) a. ma: 451 (A1) 「犬」      b. ma: 31 (A2) 「来る」      c. ma: 241 (B1) 「浸す」  
 d. ma: 33 (B2) 「痺れる」      e. ma: 213 (C) 「馬」

一方、促音節には、(2)の最小対が示すように、チワン語の他方言より1つ多い5つの声調が対立することが明らかとなった。最初の4つの声調は他方言との対応およびタイ祖語との対応が明確な声調であり、それぞれDS1, DL1, DS2, DL2と名付ける。最後の声調(2e)については2.3に詳述するが、これをDS1'と名づける。それぞれの声調の基本周波数(F0)曲線を図5に示す。

- (2) a. pak 33 (DS1) 「差し込む」 b. pa:k 24 (DL1) 「口」 c. pak 31 (DS2) 「疲れる」  
 d. pa:k 33 (DL2) 「精神病」 e. pak 45 (DS1') 「北方」

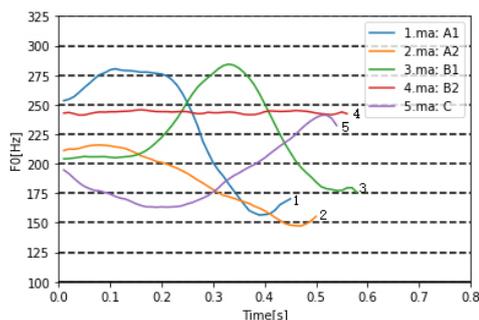


図4 平音節の声調の最小対のF0曲線

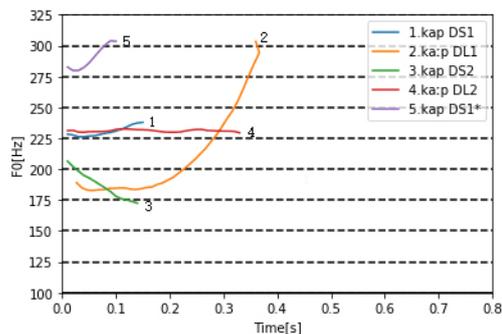


図5 促音節の声調の最小対のF0曲線

各声調に属する語を以下に例示する。

- (3) a. A1 tʰu: 「頭」 pʰjɔm 「髪の毛」 tʰa: 「目」 ɔɯw 「耳」 kʰe:n 「腕」  
 kʰa: 「足」 laŋ 「背中」 ji:w 「腰」 hi: 「臍」 naŋ 「皮、皮膚」  
 b. A2 ka:ŋ 「顎」 mɯɯ 「手」 va:j 「水牛」 lɯŋ 「猿」 ŋɯw 「蛇」  
 ɲoŋ 「蚊」 me:ŋ 「蠅」 mɯm 「シラミ」 ɔu:ŋ 「穂」 ɣa: 「チガヤ」  
 ɕi:ɯn 「ミミズ」 bauŋ 「葉っぱ」 ɕi:u: 「バナナの花」 ja:ŋ 「樹脂」  
 ɕe:w 「一、唯一」  
 c. B1 ɓa: 「肩」 kʰaw 「膝」 tʰu: 「汗」 kaj 「鶏」 ɕaŋ 「灰汁」 ɓo: 「泉」  
 ɓa:w 「未婚の若い男性」 taŋ 「背もたれのない腰掛け」 θɯw 「タガネ(鑿)」  
 ʔɯm 「満腹」  
 d. B2 tɕj 「土地、場所」 ta: 「河」 po: 「父親、男性」 me: 「母親、女性」  
 pjo:ŋ 「半分」 pɕj 「自分より年上の人」 ɔaj 「土畑地、乾田」  
 ɔoŋ 「明るい、光り」 la:m 「結ぶ」 naŋ 「座る」  
 e. C kjaw 「ヘアノット」 na: 「顔」 ke:m 「頬」 kʰe:w 「歯」 kʰaw 「米」  
 lɯ 「舌」 to:ŋ 「胃、腹部」 ma: 「馬」 maj 「木」 fa: 「空、天気」  
 f. DS1 ʔɯk 「胸」 tap 「肝臓」 pja: 「アヒル」 kap 「蛙」 mat 「ノミ」  
 pʰjak 「野菜」 nak 「重い」 ɕip 「生の、未熟」 teap 「痛い」  
 ʔip 「拾い上げる」  
 g. DL1 θa:p 「ゴキブリ」 ɓjo:k 「花」 pu:k 「樹皮、果実の外殻」 ma:k 「果物」  
 ka:t 「カラシナ」 pʰju:k 「サトイモ」 mo:k 「霧」 tʰa:p 「(肩で) 担ぐ」  
 ʔe:k 「牛の首に掛けるくびきの上部」 ɲa:p 「〈物が〉 柔らかくて丈夫で有ること」  
 h. DS2 lja:p 「爪」 nɔk 「鳥」 mwat 「蟻」 ɔok 「すりばち」 kwat 「曲がる」

fak「孵化する」 lak「盗み取る」 teat「拭き取る」 θak「(服などを)洗う」  
pak「疲れる」

- i. DL2 lur:t「血, 血液」 ma:t「靴下」 la:k「(植物の)根」 teu:k「縄」 ða:k「吐く」  
la:k「引っ張る」 pja:k「切り離す」 lu:k「(熱湯で)茹でる」  
yo:k「多産動物が産んだ子どもの群れ」 jo:t「頂上」
- j. DS1' θak「妨げられた」 θok「縛る」 jɔk「触れる、動かす」 tak「徳、道徳」  
fɔk「幸福」 hap「虐める、脅かす」 lap「竹で編んだ籠」 mak「美貌」  
pak「北、北方」 jik「億」

### 2.3 考察

平音節には5つの声調(A1, A2, B1, B2, C)が対立する。再建された祖語の対応から、最初の4つの声調は、他のチワン語諸方言と同様に、祖語のA\*, B\*が語頭の有声性に基ついて分裂した結果であると解釈できる。一方祖語の\*Cは、龍茗方言において分裂したことを示す証拠が見つからない。したがって龍茗方言の平音節における声調の数は、他のチワン語諸方言と比較して、1つ少ない。

促音節には5つの声調(DS1, DL1, DS2, DL2, DS1')が対立する。再建された祖語の対応から、最初の4つの声調は、他のチワン語諸方言と同様に、祖語のD\*が語頭の有声性および母音の長短に基ついて分裂した結果であると解釈できる。最後の声調DS1'については以下に論じる。いずれにせよ、龍茗方言の平音節における声調の数は、他のチワン語諸方言と比較して、1つ多い。

表2 各方言とタイ祖語の声調体系照合表. Li(1977: 25-28)がタイ祖語の声調体系を考察する際に用いた調査表における各方言の声調をタイ祖語の声調体系と対照させたもの。現代シャム語(タイ王国の公用語)、チワン語剝隘方言(北方方言の桂辺方言の一つ)、チワン語龍州方言(南方方言の左江方言の一つ)と龍茗方言の比較。龍茗方言の平音節において、祖語の声調\*A, \*Bは分裂を起こしているが、声調\*Cは分裂を起こしておらず、平音節の声調の数が他方言より少ないことに注目せよ。表中にはセルが上下に分割されているものがあるが、これは当該セルの上部にある声調が、さらなる変化を経験することによって、上下の2つの声調に分裂したことを意味する。例えば、シャム語と龍茗方言の場合は、\*A声調が分裂を起こしてA1とA2声調になった後、A1声調がさらに分裂を起こして2つの声調となった。この時、もともとA1であった語の一部には声調変化が生じなかったのに対して、残りの語には声調変化が生じたわけであるが、後者の語の声調の調値は、A2と同じものへ変化したために、A2と合流することになった。剝隘方言の場合は、もともとのA1声調に分裂が生じたが、他の声調と合流することにはなかった。そのため、声調の数が1つ増加する結果となった。

言語	声調									
	*A		*B		*C		*D			
シャム語	A1	A2	B1	B2	C1	C2	DS1	DS2	DL1	DL2
	A2									
龍州方言	A1	A2	B1	B2	C1	C2	DS1	DS2	DL1	DL2
剝隘方言	A1a	A2	B1	B2	C1	C2	DS1	DS2	DL1	DL2
	A1b						DS2			
龍茗方言	A1	A2	B1	B2	C		DS1	DS2	DL1	DL2
	A2									

龍茗方言の促音節の声調の数がなぜ他方言より1つ多い事実を説明するためには、分析語数を増やして、より詳細な検討を行う必要がある。この目的のために、Pittayapom (2009)によって再建されたタイ祖語の語彙リストは有用である。このリストの全788語のうち(4)の2語のみが、龍茗方言においてDS1'で実現する。

- (4) a. \*sak “plugged” (龍茗方言 θak 45 (DS1') 「妨げられた」)  
 b. \*cm.ruk “tie, to” (龍茗方言 θok 45 (DS1') 「縛る」)

(4a)の語はPittayapom (2009)に挙げられているタイ諸語ではすべて、龍茗方言のDS1'に対応する声調で実現する。(4b)の語のタイ諸語における対応は複雑であるが、中央タイ諸語に属するチワン語南方方言の多くにおいて、龍茗方言のDS1'に対応する声調で実現されている。従って、龍茗方言のDS1'声調は、DS1'声調が何らかの要因によって分裂した結果生じた新しい声調である可能性が高いと言える。

DS1'声調の発生の要因が何であるかをより詳細に検討するために、DS1'声調で実現される龍茗方言の語を数多く収集した。その結果、龍茗方言でDS1'声調で実現する語で使用頻度が高いものは、ほとんどの場合、同じく広西チワン族自治区で話されている粵語(シナ・チベット語族・シナ語派)からの借用語であることが半明した。そのような語を表3に示す。

表3 DS1'声調一覧表

番号	龍茗方言	粵語	対応漢字
I	/tak/ DS1' 「徳、道徳」	/tak <sup>1</sup> / 「徳、道徳」	徳
II	/fuk/ DS1' 「幸福」	/fuk <sup>1</sup> / 「幸福」	福
III	/hap/ DS1' 「虐める、脅かす」	/hap <sup>1</sup> / 「虐める」	恰
IV	/lap/ DS1' 「竹で編んだ籠」	/lap <sup>1</sup> / 「竹で編んだ笠；籠」	笠
V	/mak/ DS1' 「美貌」	/mak <sup>1</sup> / 「容貌、様子」	嘜
VI	/pak/ DS1' 「北、北方」	/pak <sup>1</sup> / 「北」	北
VII	/jik/ DS1' 「億」	/jik <sup>1</sup> / 「億」	億

表3から分かるように、粵語からの借用語であり龍茗方言でDS1'声調で実現されるものは、借用元の粵語の語形に分節音だけでなく声調も酷似している。

声調については、龍茗方言のDS1'声調(調値45)と粵語の第1声調(調値55、高平調、陰平/陰入)が対応している。粵語の第1声調は陰平/陰入とされるが、これは古漢語における陰類(無声)の頭子音から発展してきた声調であることを意味する。龍茗方言には、DS1'を除くと、粵語の第1声調(調値55)に類似する声調が存在しない。DS1'声調は、粵語の語(第1声調)を借用するために、龍茗方言に新たに発生した声調である可能性も検討する価値があるだろう。あるいは単に、粵語を借用する以前から存在したDS1'声調を、粵語を借用する際に利用しただけかもしれない。

## 5. 結論

本研究は中国広西チワン族自治区崇左市天等県龍茗鎮の逐仗屯で話されているチワン語の変種である龍茗方言における単音節語の声調体系を分析した。龍茗方言には平音節に5種類、促音節に5種類の声調が対立する。龍茗方言の平音節では祖語の声調\*A, \*Bは分裂を起こしているが、声調\*Cは分裂を起こ

しておらず、したがって平音節の声調の数が、他のチワン語諸方言より1つ少ない。祖語の声調Cに分裂が生じていないという点において、龍茗方言は祖語の体系をより忠実に保持する古風な声調体系を持つ。一方、龍茗方言の促音節の声調の数は他方言と比較して1つ多い。促音節の声調の数が1つ多い理由を検討し、何らかの要因によって声調が分裂した可能性のあることを示唆し、また当該の声調で実現される語は粵語からの借用語に偏っていることを示した。

本研究は分析の対象を1音節語に限定した。複数の音節からなる語における声調調整規則等を明らかにすることは今後の課題である。またチワン語が所属するタイ諸語の声調に関する通時的研究であるGedney(1989)、Liao(2016)の成果を踏まえ、龍茗方言全体に及ぶ声調の通時的変遷過程を解明することは今後の課題となる。

## 6. 参考文献

- 馬学良・戴慶厦(1986)「蔵緬語族」『民族(中国大百科全書)』中国大百科全書出版社。  
天等県志編纂委員会編(1991)『天等県志』広西人民出版社。  
広西僮族自治区民族語言文字工作委员会・中国社会科学院少数民族語研究所(1961)『壮語音系匯編』(内部参考資料), 広西僮族自治区民族語言文字工作委员会・中国社会科学院少数民族語研究所, 「天等僮音系」357-362頁。  
広西語委研究室編(1994)『壮語方言土語音系』広西民族出版社。  
広西壮族自治区少数民族語言文字工作委员会編(2008)『広西民族語言方音詞彙』中央民族出版社。  
張鈞如等(1999)『壮語方言研究』(中国少数民族語言方言研究叢書)四川民族出版社。  
韋慶穩・覃国生(編著)(1980)『壮語簡誌』民族出版社。  
亀井孝・河野一郎・千野栄一(編)(1993)『言語大辞典』三省堂。  
黄海萍(2018)「チワン語龍茗方言の音韻体系」『言語社会』12号、366-343頁。  
千島英一(2005)『東方広東語辞典』東方書店。  
益子幸江・鈴木玲子(2017)「ラオ語の声調についての音響音声学的研究」『東京外国語大学論集』94、19-36。  
西田龍雄著(2000)『東アジア諸言語の研究I—巨大言語群：シナ・チベット語族の展望』京都大学学術出版会。  
柳村裕(2012)『ラオ語の声調の音声的・音韻的構造と歴史的変化』東京外国語大学総合国際学研究所博士論文。  
Chao, Y. R. (1930), "A system of tone letters." *Le Maître Phonétique*, 45, 24-27.  
Hudak, Thomas John (1991), "William J. Gedney's The Tai dialect of Lungming: Glossary, texts, and translations," Center for South and Southeast Asian Studies, University of Michigan.  
Gedney, William J. (1989), "A checklist for determining tones in Tai dialect," In Robert J. Bickner, John Hartmann, Thomas John Hudak, and Patcharin Peyasantiwong (eds.), *Selected Papers on Comparative Tai Studies*, 191-206.  
Li, Fang Kuei (1977), *A Handbook of Comparative Tai*, Honolulu: The University of Hawaii Press.  
Liao, Han Bo (2016), *Tonal Development of Tai Languages*, Presented in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Master of Arts in Linguistics, Payap University, Chiang Mai, Thailand.  
Liao, Hanbo (2017), "Proto-Tai reconstruction of 'maternal grandmother' revisited: \*na:j<sup>A</sup>, \*ta:j<sup>A</sup> or ta:j<sup>B?</sup>," *Language and Linguistics* 18:1, 116-140.  
Pittayaporn, Pittayawat (2009), *The phonology of Proto-Tai*. New York: Cornell University dissertation.